

いちごいちえの女（小説）

星と泉7号（2011年）



1 トルコ記念館の女

みなさんは檜野埼灯台を知っていますか。漢字を知らない人のために「かしのざき灯台」とふりがなをつけます。檜野埼灯台を知らない。では説明します。まず、大島を知っていますか。知らない。ここは串本となりは大島。知っている。歌の方が有名なんだ。和歌山は本州最南端なんです。和歌山は知っていますか。知っている。みかんの産地だ。和歌山ラーメンだ。熊野古道だ。終わり。それだけ：

和歌山人には、どうしても「ざ」「じ」「ず」「ぜ」「ぞ」がうまく言えない人が多い。ぞうきんがどうきん。象がどう。でも私は大丈夫だよ。どうきんさん、どうさん。結局私も和歌山人だ。

檜野埼灯台への道にトルコ記念館がある。私の職場です。職員は一人、私だけ。年中無休だから。私の休みにには高校生のバイトが入ります。

大島はトルコと密接な関係があります。あっ、団体さんがやってきた。私の案内で紹介します。えへん。

「一八九〇年、今から百二十年前、トルコからオスマン皇帝の特使が派遣されました。皇帝親書を明治天皇に奉呈し、オスマン帝国最初の親善訪日使節団として歓迎を受けました。多くの乗員がコレラに見舞われたため九月一五日になってようやく横浜出港のめどをつけ、日本側が台風の時期をやり過ぎようにつきまされたのですが、その制止を振り切って帰路に灯台近くで座礁しました。犠牲者五八七名という大惨事でした」

「二階からその現場を見ることが出来ます」と、言うたいがいの人には興味を示します。

「おお、このパンフレットといっしょじゃ」
「いろいろな方言が飛びかいます。」

「地元大島村の人々はトルコ人の遭難者に温かい対応を行いました。日本とトルコの友好の始まりとして有名なエピソードになっています」

「おみえそんなこと知っていました」

「知るわけなんぞ」

「とうざいのほうに行かれましたら、」

「とうざいけ？」だの方もおかしくなってきた。

「どうどうがあります」

「もう、いやざ」

団体さんが出て行くと、いっぺんに孤独になる。トルコとの友好も喋りたかったのに。だからあなたに喋ります。

「イラン・イラク戦争で、トルコ機は近隣に位置することから陸路での脱出もできる自国民に優先して日本人の救出を計ってくれました。実際この救援機に乗れなかったトルコ人約五〇〇名は陸路、自動車でイランを脱出しました。このようなトルコ政府とトルコ航空の厚情の背景には、一八九〇年（明治二十三年）日本に親善訪問した帰途、和歌山沖で遭難したフリゲートエルトゥール号救助に際し日本から受けた恩義に報いるという意識もあつたと言われて

います」
「もうだれもいない。団体の予約は入っていないから、誰も来ないと思う。五時に閉店。まだ日が落ちていない。灯台で海が見たい。もし門が閉じていて、み、つ。私だけが知っている抜け道がある。それはひ、

灯台に上がり、水平線を見ている。日が昇り日が落ちる。今日は曇っているから夕陽は見られない。どつと暗くなる。灯台に灯が入った。一四〇年も律儀に海を照らしている。日本最初の石造灯台だ。近くにある官舎には灯台守たちの家族がいたのだろう。一家あげて海を守ってきたのだろう。今は誰もいない。海の音しかない。少し寒い、風が気持ちいい。二二才、処女。

真つ暗な海を見つめてみると、奇妙な気分になった。永遠なんてない。ふと思つた。わたしも結婚するだろう。子供を生み、おばさんになり、年寄りになり、孫ができ、おばあちゃんになる。そして死ぬ。地球も、宇宙もそうだ。やっぱり永遠なんかはない。

唐突に秋葉原通り魔のカトウのことを思った。わたしと出会っていたらあんな事件を起こさなかった。かもしれない。誰もがカトウになるかもしれない。被害者側にも。携帯で現場を喜々として写していた。あなたにも。そんな世の中に生きているんだ。もう二年経った。ほとんどの人が思い出すこともない。ふつと空を見上げるといつの間にか白い月が出ていた。

冬場の平日はトルコ記念館を訪れる人は少ない。榎野埼灯台へ行く人も通り過ぎていく。昨日は二組だった。老夫婦と一人旅の女性。夫婦はお互いをいたわるように階段を上がって行った。女性はぼつんと一人離れていた。彼女は足音をしのばすように歩いた。

目の前を様々な人生が横切っていく。そして多分二度と会うことはない。

携帯が鳴った。日米修好記念館の幸子さちこさんからだ。
「今何してんの？」
「海を見てる」
「何が見えるの」
「真っ暗、灯台の灯りが真っ黒な海を照らしてる」
「そう、星はないか」
「幸子さんは何してんの」
「もう帰る。実家によって、アリスをつれてね。それじゃ、さようなら」
と、言つて電話は切れた。幸子さんは私より五個年上。アリスはフランス人との混血で幸子さんの娘だ。三才。アリス・マルタン。
男はふらつと、日米修好記念館に入つてきた。名前はなんだった。自称画家。大島の絵を描きながら島をまわつていた。日米修好記念館に只で入つてくる男になり、実家に居着いてしまった。最初は猛反対していた両親も、幸子さんの妊娠を知ると認めないわけにはいかなかった。彼の絵は何回か見たことがある。私よりターヘだった。生まれてきた子供に男はアリスと名づけた。僕は不思議の国のアリスが好きやねん。たどたどしい日本語でそう言つたという。誰も反対しなかった。女の子は金髪で、青い目をしていたから。
幸子さんは男の絵を「売り物」という札を立てて日米修好記念館に置いた。明らかに業務規定違反。私も絵を見たがやっぱりターヘだった。「売り物」と言う字の下手さもすごかった。
「ピカソみたいやね」
と、皮肉を言うのと、幸子さんは
「私もそう思うんや」
と、言つた。
意外にもその絵は、一〇万円で売れた。夫婦はるるん気分で一〇万円の値札をつけて絵を五枚置いた。ひと月たつても一枚も売れなかった。「やっぱり一〇万円はねえ」
一万円にした。また、ひと月たつても一枚も売れなかった。千円にした。また、ひと月たつても一枚も売れなかった。百円にした。また、ひと月たつても一枚も売れなかった。どうぞお持ち帰りくださいと書いた。でも、一枚もなくならなかった。一〇万

円で買ったのは幸子さんのお父さんだという噂が流れた。それも真偽のほどは定かでない。男はアリスの名前をつけ、大量の愚作を置いて島を出た。遠く離れた異国の、それも小さな島に子供をつくつて。

幸子さんはアリスに友達のようにつきあっている。「これ、お母さんに似合うと思う？」

「アリスはどれが好き？」

「今度お休みに行きたいところがある？」

「どっちのケーキにする？」

でも、父親のことを聞かれたら、どうしようかと迷っている。海金剛を見ながらそう言った。私の肩に手を置いて、

「そうや。パパがいるから君はここにいるんだよ。」

それってどう？」

「ええよそれで」
即答した。



海金剛は奇岩だ。海から三角形の岩がいくつも突き出ている。海金剛の由来については知らない。知らない。姿でも、今、私の前にあるのが海金剛だ。何年あんなに立っているのだろう。それに比べると私の命なんて一瞬だ。

私と幸子さんは姉妹みたいに仲良く黙って海金剛を見ていた。

2 日米修好記念館の女

日米修好記念館は一七九一年アメリカ商船が大島に来訪し、日米交流したことを記念して建てられた。アメリカ人として日本に最初に渡航して貿易を申し込んだのはジョン・ケンドリックです。串本町の紀伊大島に来航しました。ペリー提督が浦賀に来航する六二年も前です。

また、^{つばき}椿は灯台に忍び込んだんだ。でも夜の灯台つてすてきだろう。真っ黒の海に灯台の光が伸びる。

幼い頃は、いつも灯台の下で遊んだ。椿もベビーカーに乗せられて遊びに来ていた。それから二十年余、二人は立派（？）な女になった。椿は美しくて優しい娘だ。今は一期一会の人々を相手に私と同じような仕事をしている。

二〇〇二年には灯台に展望台が完成し素晴らしい眺望になった。朝日が上がり夕日が落ちる同んなじ水平線に。さあ仕事は終わりだ。

私はアリスを一人の人格としてあつかっている。愛おしいけれど私の所有物ではない。青い目にアリスの面影を見ることがある。でも、アリスの所有物でもない。アリスはアリスだ。あいつ本当にアリスという名前なんだろうか？ アラン・ドロン。考えても仕方がない。さあ、帰ろう。アリスが待っている。

3 トルコ記念館の女

朝八時に出勤する。まずトイレ掃除だ。トイレは一日三回チェックを入れる。トイレは上の駐車場にあるから、あまりこままない。

^{とおる}徹からメールが来た。

『今度休みいつ？』

すぐに返す。

『水曜日だよーん』

すぐ返ってくる。

『串本にドライブにいかへん』

しばらく考えてメールを返した。

『ええよ予定あらへんし』

徹は古い旅館の長男だ。と、思う。弟の方が優秀だと聞いたことがある。同級生だ。成績は最悪だった。

徹が家に迎に来てくれた。店のバンを借りてきたという。串本大橋を渡って、橋杭岩を展望できる駐車場でおりました。

ここには何回も来ているが、いつも感動する。壮观だ。私の住んでいる大島や、大橋が見える。うすかわ饅頭を三個買った。当然私が二つで徹は一つだ。先に一つ食べた。

「ううんおいしい！」

「俺にもくれよ」

「あとであげる」

「いこら。夕方にも通るし」

冷たい風が気持ちいい。初っぱなから、来てよかったと思つた。



今大門坂に寄つた。ここも何回か来たことがある。今はパワースポットとして人気なんだって。かなり坂道を歩きます。足ぱんぱんになった原因かなあ。

夫婦杉を過ぎると空気が一変した。冷気というか、不思議な雰囲気になった。熊野古道の雰囲気味わう。ここからは異界なんだ。古いにしへ人の歩く背中が見えた。何百人の人がひたすら歩いていった。そして、かき消すように消えた。

那智の滝に向かって車を走らせる。カーブをいくつもまわると、突然滝が現れた。「おう」と、思わず叫んだ。

「なんやねん」

「滝、滝、滝が見えたよ」

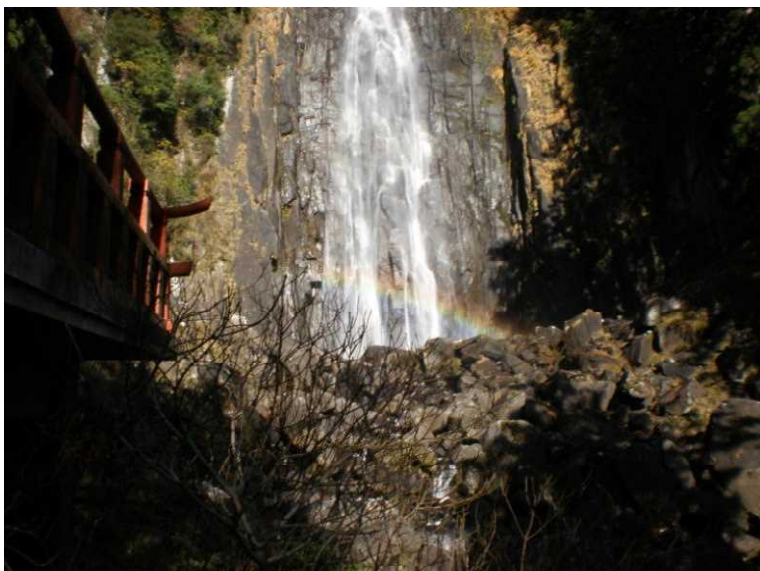
那智の滝は一瞬にして視界から消えた。

「急にわめくからびっくりするやん」

「ごめん。せやけどきれいやったなあ」

滝壺に虹がかかっていた。手を合わす。徹も手を合あわわしていた。

青岸渡寺せいがんとじに上がる。絵はがきなんかでよく見る光景だ。滝と三重塔がバランスよく見える。



4 一人旅の女

今日も忙しいのかな。忙しいのはいいことだ。父

ちやんと勝浦でまぐる料理店を始めて三十年近くに
なる。息子は二人いるが大阪で働いている。滅多に
帰ってこない。

客はほとんどが観光客だ。ほとんどが一期一会だ。
十一時最初の客が引き戸を開けた。若い女性だ。
一人だった。一人旅の客も多い。

「いらつしやい」
元氣よく声をかける。

「いらつしやい」
父ちやんもくぐもった声を出した。

一番端に腰を下ろした。お茶を出す。メニューを
じつと眺めている。しばらくして、「まぐる定食」
と、小さな声で言った。

「まぐる定食、一丁」
と、父ちやんが言う。

「へい、まぐる定食、一丁」
と、私が繰り返す。夫婦でいつの間にか出来た約
束だ。注文の確認である。カウンターだけの店だか
ら、父ちやんに聞こえないことはない。

父ちやんは私にまぐるを触らせない。朝一番に仕
入れたまぐるを一日中料理する。私はそれ以外のこ
とをする。ご飯をよそい、お茶を入れ、後片付けを
する。お客さんのおしゃべりも、賑やかしだ。

「寒いね」

「寒くない。でもシャッター街は寒かった」

「昔は賑やかやってんけど。どこからきたん？」

「東京」

「ずいぶん遠いね。どこをまわったの？」

「大門坂。那智の滝」

この娘は単語ばかり喋る。

「どうだった？」

「すてき」

会話が続かない。ブチブチと切れる。その時、賑
やかな年寄りが三人、入ってきた。

「いらつしやい」

「いらつしやい」

「まぐる定食、三丁」

「へい、まぐる定食、三丁」

次に若いアベックが入ってきた。女の子は若くて

かわいい。化粧をしていない。口紅を薄く引いてい
る。でもリップクリームかもしれない。

男はどこにでもある顔だ。と、いうより不細工。

「車はどこに停めたらええん」

青年が言った。

「一八番から二〇番」

私は共同の駐車場を言った。

「ほんなら回してくるわ」

「まぐろ定食でええね」

「ええよ」

青年は出て行った。

「まぐろ定食、二丁」

「へい、まぐろ定食、二丁」

店は一気に活気づいてきた。

「生ビール」

女の子が言った。

「生ビール一丁」

私は言った。

「生ビール一丁」

珍しく生ビールは父ちゃんが入れた。この娘が気

に入ったのか。いくつになっても嫉妬の種は尽きな

い。私だっと思ってくれど、父ちゃんは無関心だ。

「大門坂から那智の滝、みんな遠足でいったところ

やけど」

「どこから来たん？」

「大島生まれの大島育ち。ここは、串本となりは大

島」

ほっておいたら歌い出しかねない。さすが喋りす

ぎと思ったのだろう。生ビール半分を一気に飲んだ。

左端と右端でえらいちやうなあ。

串本大橋が完成したんは、一〇年ほど前。それ以

前は大島と串本をむすんでいるのは巡航船とフェリ

ーしかなかった。その巡航船も、フェリーも串本大

橋の完成に伴い姿を消した。みんな車社会になって

いくなあ。大島には父ちゃんとよく行った。若かつ

たし。おっ、考え事してたらあかん。商売、商売。

青年が帰ってきた。

「分かった？」

「と大島がきいた。」

「分かった、分かった。ええなあお前」

「うちは運転せえへんもん」

「俺はアツシーかいな」

「足の短いアツシーやな」

大島が言った。

滅多に笑わない父ちゃんも笑った。三人の男も笑った。一人旅は笑わなかった。

一人旅がメニユーをじっと見ていた。

「まぐろの内臓料理一品」

「まぐろはほかすところがあらへん。内臓もな」

「ふーん」

「白子でも食べてみるか。ふぐの白子と同じや」

「一つ」

「白子一丁」

「白子一丁」

と、私が返す。

「仕事なにしてんの？」

おぼはんのお節介。だけどズカズカと入っていった方がいい。これは接客三十年の知恵だ。

「契約社員。契約期間が終わると、次の契約までバイト。節約。それで旅に出る」

「そんな生活はあかんで」

三人の真ん中が言った。

「おい、説教するな。もう先生やないんやから」

左の男が言った。

「わしら同級生」

ひとしきり、年齢当てになり。料理が出来て、ご飯を盛ろうとすると、三人が声を揃えて、

「ご飯半分」

と言った。

「えっ」

と、聞き返すと

「年寄りはあるまり飯を食うたらあかんねん」

右の男が言った。

「車で来てんの」

「レンタカー」

白子は食べにくそうだった。口に合わないのかもしれない。

「ご飯は残してもええけど、まぐろはあかんで」

意地悪おぼさんは言った。

「包んで持って帰り」

耳元でささやくように言った。
今度は青年がメニューを睨んでいる。そして、突

然、
「大トロ三千元」

と叫んだ。

父ちゃんもつられて、

「大トロ三千元」

私もいちびって、

「大トロ三千元」

今度は一人旅の女も笑った。きれいな白い歯並び
だった。

5 くじらの博物館の女



鯨がこんな芸をするとは知らなかった。思わず拍
手をする。

「鯨に餌をやれるねん」

「おいおい、よく遊ぶなあ」

徹はあきれたように言った。私は子供に戻ってい
る。急に足が止まった。飼育員の女の人が男の飼育
員に叱責されている。女の人には直立不動だ。何かミ
スをしたのかしら。私には分からなかった。でも気
持ちは分かるような気がする。シヨーの中であんな
に輝いていた制服が悲しい。かけよって、肩を抱い
てあげたい。でも、通りすがりの私にはそれができ
ない。

餌に群がってくる鯨も悲しい。私は鯛を全部放り込んだ。
「女のやることはようわからんわ」
後ろで見ていた徹が言った。

6 無量寺の女

「次は無量寺」

徹が言った。計画は全部徹がたてた。どこへ連れて行ってくれるのか楽しみだった。でも、旅は終わりに近い。

「無量寺？」

「円山応挙は知っている」

「知らない」

「幽霊の絵は知ってる」

「知ってる」

「それを描いた人の弟子。なんしか江戸時代の人。

調べたけど、みんな忘れてしもた」

「頭悪いもんね」

「ほつといて」

「ものすごい道が狭いやん。気づけてな」

二人とも黙った。狭い道を抜けると無量寺があった。

受付に行くと四〇才ぐらいの女の人が座っていた。

この人も一期一会の女だ。

「ご覧になったら、宝物殿に案内しますから」

「レプリカか。なんかしようもないな」

私は言った。

五分ぐらいで見終わった。長沢ながさわろせつ芦雪の絵が主なのだとぼんやり分かった。

女の人が先に立って、宝物殿への道を歩いた。でかい建物だと思っていたのが宝物殿だった。女の人には暗証番号を押し、次に鍵を開けた。少しわくわくしてきた。

中に入ると、龍虎図が飛び込んできた。レプリカと全く違う。本物は本物だ。歩んできた年月が違う。虎は今にも飛びかからんばかりだ。龍は火を噴きそうだ。龍が火を噴くのかどうか知らないけれど。

「すげえ」
徹が叫んだ。

「ごゆっくり見てください」
女の人が説明をした。龍虎図に魅せられて、なんにも聞こえなかった。

猿回しのついたてを見てみると、受付の人が「裏も見てください」。裏を見ると猿がいた。

本堂を見た後、日本で一番小さい美術館を後にした。

「昔の人はすごいなあ。俺なんかなんにも残せへんけど」

「みんなそうだよ」

素直な気持ちになつて言った。

「俺は子孫を残すぞ」

ぞをどと言った。

何を威張っているのだろう。でも、それは私の子孫かもしれない。本尊は人差し指と親指をまるくして輪っかをつくっていた。下に蛇がいた。指は女性器で蛇は男根かもしれない。那智の三重塔を見た。春画みたいな仏画を思い出していた。徹は絵について何も言わなかった。私の幻覚かもしれない。目をそらした。楽しんでそうにセックスをしていた。なぜ目をそらしたのだろうか？

それは原点だと思う。一人だけの好きな人とセックスをして子供を産む。その人と私だけの子供を産む。

帰りに橋杭岩はしぐいいわによつた。

「もうデートは終わりやね」

徹が言った。

「デート？」

「デートと違うか。エッチもしてへんのに」

「エッチしたら夫婦や」

「そうか」

二人並んで夕闇が迫る橋杭岩を見る。朝とは違った趣があった。仏の姿のようだ。影が海面に落ち神秘的です。橋杭岩に手を合わせた。徹は柏手を打った。徹には神様に見えているのだろう。私はなぜか少し泣いた。徹は私の肩をぽんぽんとたたいた。こいつの嫁になるのかも。

7 トルコ店の女

私の名前は奈緒子。夫はトルコ人。名前はファティ・オゼリ。だから私は奈緒子・オゼリ。二人でトルコ店をやっている。でかいトルコの旗を掲げて、トルコ石、のびるトルコアイス、トルコの民芸品なんかを売っている。近くに片田さんの店がある。のびるトルコアイスに飽きたら、トルコアイスを持って、片田さんの店に行く。片田さんは五〇才半ばで金柑ソフトを売っている。商売敵だがそんな感じは全くない。トルコアイスを金柑ソフトに交換してもらおう。二人並んでアイスクリームを食べる。



フアーティとは学生の時、トルコ旅行で知り合った。私より七つ年上だ。私を追って日本にやってきた。五年は東京に住んだ。私は大島出身ではない。東京の生まれだ。フアーティの友達の友達がトルコ店をやめるので後任を探していた。三年前のことだ。今年、私は大島で三十回目の誕生日を迎え、フアーティは三七才になった。私も言葉に苦労した。でも、客商売だから、フアーティは私よりもっと苦労したと思う。おじぎの練習から始めていた。

大島は温暖な気候だ。自然もいっぱいある。招かざる客、台風も来る。冬には椿の花があちこちに咲く。人情も厚い。フアーティも私もすぐに気に入った。買い物にも不自由しない。串本大橋を渡ればオークワもコンビニもエバグリーンもある。

フアーティは大島がふる里だとよく言っている。よほどのことがないかぎりトルコに帰らない。

今年の六月に日ト友好百二十年祭があった。トルコ軍艦エルトゥールル号が和歌山県串本町檜野沖で遭難して百二十年を迎える。トルコからの来賓も多い。

フアーティは張り切っていた。主に通訳のボランティアをした。友好百二十年祭は成功のうちには終わった。フアーティの姿が見えなくなった。トルコ館の椿ちゃんに聞くと、灯台の方に歩いて行つたと言った。灯台の螺旋階段を上がり、海の方にまわるとフアーティがいた。じつと海を見ている。トルコの方を見ているのだろうか。いつもの大きな背中が小さく見えた。私は足音をしのばせて、螺旋階段を下りた。

8 トルコ記念館の女

年が明け、二月の中頃になった。大島椿道路に私（椿）が咲く頃だ。幸子さんと奈緒子さんと私でピクニックに出かけた。幸子さんはアリスを親に預けた。三キロ弱の坂道は三才の子には少しきつい。

私がおかず係。幸子さんはおにぎりとサンドイッチ係。奈緒子さんはデザート係。冷凍食品をチンしてお弁当箱に詰めた。手抜きだ。

奈緒子さんの車で行った。幸子さんが近所の親戚

に車を停めてもらおう手配をしていた。奈緒子さんの
運転はかなり怖い。

三人ともルンルン気分だ。

「ピクニックって久しぶり」

奈緒子さんが深呼吸しながらいった。

「椿ちゃん、徹君とドライブに行ったん？」

幸子さんが言った。

「那智の滝がすごかった」

「那智の滝？」

奈緒子さんが聞いた。

「奈緒子さんは行ったことないの？」

と、幸子さん。

「仕事、仕事だからね。フアーテイと行こうかな

あ」

「串本からあんまり遠くないし。勝浦のまぐろもお
いしかったよ」

「フアーテイは魚が好きだから」

平日だから、人は少ない。やがて椿道路につく。

三千本の椿が植えられている。急に明るくなった。

ほぼ満開だ。適当な場所を見つけて、シートを広げ
る。

私も手抜きだったが二人はもつと手抜きだ。幸子
さんはコンビニおにぎり三個とサンドイッチ三パッ
ク。奈緒子さんは究極の手抜き、バナナ三本。私の
おかずは好評だった。二人ともおいしい、おいしい
と言って食べた。奈緒子さんは「作り方を教えて
ね」と、まで言った。フアーテイが気の毒になった。
でも、冷凍食品はおいしい。下手につくるよりもお
いしいのかもしれない。三人は大きな口を開けてバ
ナナを食べた。

「きれいなハンカチやね」

奈緒子さんが取り出したハンカチを見て、幸子

さんが言った。

「イスタンプルで買ったの」

奈緒子さんがこたえた。確かに日本製では見られ
ない色合いだった。

「このハンカチを落としたの。拾ってくれたのがオ
ゼリ。それがなければ二人は出会うことはなかった。
わたしもここにいない」

お弁当をしまい、ゆっくりと坂を下った。途中で
幸子さんが突然言った

「幸子という名前が悪いのよ。顔は気に入ってるか
ら変えたくないけど名前は変えたいなあ」

「私は椿だよ」

「私は奈緒子・オゼリだよ。でも、名前は変えたく
ない。運命なもの」

「でもアリスはかわいそうだよ。一生会えない父親
の名前を背負っている」

三人とも黙った。

「あなたの名前にしたら」

奈緒子さんが言った。

「いやよ」

即座に幸子さんは言った。

三人は手をつないで椿道路を下った。

「椿ちゃんはずーとここにいるの？」

幸子さんが聞いた。

「多分。ここが好きだから。海が好きだから」

私は言った。

「灯台も、水平線も、ここに住んでいる人も。当然、
トルコ記念館も」

串本節を三人で歌った。

ここは串本 向かいは大島

中をとりもつ 巡航船

アラ ヨイシヨ ヨーイシヨ ヨイシヨ

ヨーイシヨ ヨイシヨ「コラシヨ」

(ハア オチャヤレ オチャヤレ)

奈緒子さんが歌い。幸子さんと私が合いの手を入
れる。奈緒子さんは歌がうまい。美人だ。賢い。天
は二物を与えずなんて嘘だ。二物も三物も与えてい
る。

気持ちのいい風が頬にあたる。

春は近い。

二〇一〇年一月二六日 了

